

近年の英語圏における宗教の地理学的研究の動向

—L・コンとR・W・スタンプを中心として—

藤村 健 —*

I. はじめに

英語圏では、宗教の地理学的研究は、人文地理学の鍵となる概念や手法をしばしば反映するとされる¹⁾。パーク (C. C. Park) は、1994年に宗教の地理学的研究を展望した中で、ポストモダニズムと構造化理論 (構造—行為体論) とが今後の研究の枠組を形成することを予想した²⁾。彼によれば、ポストモダニズムは公開性・多元性・可能性を強調し、あらゆる知が相対的であると主張する。また、構造化理論については、グレゴリー (D. Gregory) の個人 (行為体) と構造に関するモデル³⁾ に基づいて、人々と宗教の相互関係を考える手がかりを提示した。

その後、英語圏では実際に、ポストモダニズムと構造化理論から得られた分析の枠組に基づいた研究が生み出されている。そこで本稿では、シンガポールのコン (L. Kong) とアメリカのスタンプ (R. W. Stump) の業績を通して、こうした2種類の研究動向を概観する。両者は共に、15年以上にわたって宗教の地理学的研究を積み重ねてきており、英語圏における有力な研究者と呼ぶことができる。コンはポストモダニズム、とりわけカルチュラル・

スタディーズに影響された「新しい」文化地理学の立場から、社会集団による空間形成に関する研究の一環として、宗教施設を分析している。またスタンプは、主に宗教分布の研究を行ってきたが、2000年に、宗教原理主義の地域的特性を、構造化理論の応用により解明している。

ところで筆者は、これまで宗教空間と社会集団との相互関係を動的に分析することに努めてきた。本稿では、コンとスタンプの研究を通して、社会的視点からみた宗教空間の研究に関する見通しも探ってみたい。

II. コンと「新しい」文化地理学

1. 「新しい」文化地理学の台頭

1980年代後期、カルチュラル・スタディーズの影響を受け、イギリスのコスグローヴ (D. Cosgrove) やジャクソン (P. Jackson) らによる、いわゆる「新しい」文化地理学が台頭した⁴⁾。こうした研究の中では、それまでのパークレー学派や人文主義による文化地理学研究が批判され、文化を生産関係の反映と考える文化唯物論の立場が採用された。具体的には、特定の空間が社会集団によって形成される過程の分析を通して、空間形成の社会的条件、とりわけ民族・階級・ジェンダーの反

* 立命館大学大学院

映の解明が行われた。だが、宗教はこうした条件としては重視されていなかった。

一方、宗教地理学の分野でもこの頃には、レヴィン (G. J. Levine) やクーパー (A. Cooper) らによって、宗教制度、宗教的景観・場所、宗教体験などを社会関係から解き明かすべきであるという主張がなされるようになっていた⁵⁾。こうした状況の中で、宗教に関わる様々な空間的要素を、「新しい」文化地理学の枠組に位置づけたのがコンである。

彼女は、後述するように「新しい」宗教地理学の推進者だが、それ以前に「新しい」文化地理学の研究者であり、その研究対象は宗教空間に止まらず多岐にわたっている。そこで、彼女の宗教空間研究について述べる前に、まずその他の主な研究を概観しよう。

2. コンの「新しい」文化地理学研究

コンは、1980年代後期以降、主としてシンガポールとその周辺における文学やポップ・ミュージック、都市景観、自然景観などを研究対象としてきた。

文学では、まず、マレー半島を舞台にした植民地文学を取り上げた⁶⁾。ここでは、書き手の西洋人によるマレー半島の景観や住民への意味付けを、人種主義や植民地主義との関連で論じている。このほか、中国民話の内容から中国人の人種主義を読み取ったものや⁷⁾、シンガポールの児童文学にみる「カンボン」(マレー半島の農村)へのノスタルジーと文化遺産との関係を解明したものがある⁸⁾。

ポップ・ミュージックに関しては、音楽が人々の日常生活の社会的・空間的(再)生産に寄与しており、社会的・政治的文脈の中で、音楽の製作者と消費者とが特定の時空間に共存していることを研究者は意識すべきで

あると主張した⁹⁾。こうした視点から、シンガポール政府のキャンペーンソングである「国民」歌謡と、これに対する風刺を込めた若者向けポップ・ミュージックとを事例として取り上げ、これらをヘゲモニーとそれへの抵抗として対比させた¹⁰⁾。事例研究にはこのほか、シンガポールの流行歌手を対象に、彼らのナショナルな歌詞や発言、西洋音楽の影響、東アジアでの商業的成功などを、ローカル性とグローバル性との対比や商業主義の文脈で分析したものや¹¹⁾、国立博物館による英語のポップ・ミュージックの回顧展を、政府による文化遺産の形成として捉えたものがある¹²⁾。

自然景観や都市景観の研究では、シンガポール政府による郊外の自然保護や都市再開発、旧市街の景観保全とそれに対する住民の反応とを、文化遺産や商業主義、ヘゲモニーと抵抗・交渉の概念を応用しながら分析したものが多い¹³⁾。このほか、シンガポールの女性や若者の自然観の社会的背景について分析したものや¹⁴⁾、高齢者の場所への愛着を扱ったものがある¹⁵⁾。

このように、コンは極めて多様な研究対象を扱っているが、分析概念としては、基本的にコスグローヴやジャクソンらが提唱する「新しい」文化地理学の方向に沿って¹⁶⁾、場所への意味付けや文化遺産、ナショナリズム、アイデンティティ、民族、植民地主義、商業主義、ジェンダー、ヘゲモニーなどを用いている。このような姿勢は、おおむね宗教空間に対しても踏襲されている。

3. 「新しい」宗教地理学研究

コンが初めて本格的に宗教の問題を取り上げたのは、1990年の、宗教の地理学的研究に

関するレビューにおいてである¹⁷⁾。この中では、景観変化への宗教の役割をテーマとするパークレー学派の研究を批判した上で、「新しい」文化地理学の動向に沿って、民俗宗教や個人の宗教的体験といった宗教の非制度的側面や、特定の対象物や景観が宗教的意味を与えられる政治的過程を解明していく必要性を主張した。

さらに、彼女は2001年のレビューにおいて、「新しい」宗教地理学研究の枠組の構築を図った¹⁸⁾。この論考では、これまで「新しい」文化地理学研究の中で民族・階級・ジェンダーなどに比べて重視されてこなかった宗教を、その重要な研究対象の一つとして位置づけようと試みた。枠組としては、研究対象を(1)聖なる空間 / 宗教的場所と、(2)宗教的アイデンティティ / 共同体とに類型化した上で、(1)・(2)それぞれの政治学と詩学とについて分析していくことを提案した。具体的には、「聖なる空間の政治学」・「宗教的場所の詩学」・「宗教的共同体の詩学」・「宗教的アイデンティティ・共同体の政治学」という4つのテーマが設定された。まず「聖なる空間の政治学」の研究では、宗教空間を巡る競合が世俗社会と宗教、多数派と少数派といった対立軸から分析される。「宗教的場所の詩学」の研究には、聖地化の過程に注目するものや、聖地への愛着を分析するものが相当する。「宗教的共同体の詩学」の研究には、宗教施設を共同体の社会的中心として見なしたものが当たる。だが、彼女はこうした研究に対しては、儀礼への参加が即、他の参加者との統合意識を意味する訳ではないと批判した。そして、宗教的共同体の内部または相互の対立を対象とした「宗教的アイデンティティ・共同体の政治学」に

も目を向けるべきであるとした。

宗教に関するレビューとしてはこのほか、死の景観研究や、宗教による放送・インターネット利用の研究を、「新しい」文化地理学の文脈に位置づけようとしたものがある¹⁹⁾。

彼女は、1990年代にシンガポールの宗教に関する事例研究を相次いで発表した。彼女にとって、キリスト教・イスラム教・ヒンドゥー教・「中国宗教」(仏教・儒教・道教を習合した信仰)などが併存するシンガポールは、同一の社会における文化の併存や摩擦に注目する「新しい」文化地理学研究²⁰⁾に適った地域だった。

彼女が最もよく取り上げたのは、シンガポールの都市部に存在する様々な宗教施設である。まず1992年には、ある住宅地区の住民に対するインタビューを通して、彼らが宗教施設へ与えた宗教的・世俗的・社会的意味を検証した²¹⁾。まず宗教的意味に関しては、各教団の信者がそれぞれのコスモロジーに基づいて宗教施設を神聖視していることを示した。世俗的意味に関しては、住民が個人的な人間関係を持つ場所として、宗教施設が機能していることを明らかにした。また社会的意味に関しては、宗教施設が各教団の社会的中心として機能していることを示した。ただ、この研究は、全体的に静態的で、宗教施設を無批判に社会的中心としていることから、彼女はのちにこれを自ら批判している²²⁾。

しかし1993年の研究では、宗教施設の問題に、より政治的な視点を導入した²³⁾。シンガポールでは、政府が都市計画に基づいて、各教団に施設の用地割り当てや建築認可、移転指示を行っている。こうした政策は、国土の合理的利用や、社会倫理を涵養する宗教に対

する国家の保護が目的とされている。彼女は、政府の政策やそのイデオロギーと、それに対する各教団の反応や信者の施設への意味付けとを、国家のヘゲモニーとそれへの抵抗・適応として描き出した。宗教施設を扱ったものとしては、このほか2000年に、政府から施設用地を得られなかったキリスト教団が用いた「民家の教会」の変遷を、非公式的聖地の事例として扱ったものがある²⁴⁾。

1996年には、シンガポールにおける宗教と経済の関係についても取り上げた²⁵⁾。この中では、経済発展を目指す政府による宗教のイデオロギーの利用や、土産物販売などにみられる資本による宗教の商業的利用、教団の営利企業的な振る舞いと、これに対する信者の個人的不満とを、ヘゲモニーとそれへの反発という構図で分析した。1997年には、シンガポールのカトリックにおける女性の場所について分析した。この中で、教会では女性が「家庭的な」裏方の仕事を担う一方で、家庭での祈祷は女性が主導していることが明らかにされた²⁶⁾。さらに2000年には、規格化された公営の高層アパートにおける中国宗教信者の儀礼面での対応を、国家のヘゲモニーのもとで進められる生活空間の近代化に対する信者個人の交渉、あるいは儀礼空間の再構築として捉えた²⁷⁾。

このように、コンの事例研究は「聖なる空間の政治学」に関するものが中心である。これらの中では、主に宗教空間を巡る国家と教団や信者との立場の相違が、ヘゲモニーの概念を用いて分析されている。しかしながら、国家による宗教支配に対する教団や信者個人の明確な抵抗の言説は顕在化しにくいので、ヘゲモニーに対する「抵抗」というよりは、

「適応」や「交渉」といったより穏当な概念が主に用いられている。一般に、ヘゲモニーに対しては必ずそれへの抵抗が存在するとされるが、宗教空間の研究では、ヘゲモニーと抵抗という図式を直接適用できない難しさが見て取れる。

次に、宗教の地理学的研究において構造化理論の応用を試みた、スタンプの業績を概観する。

III. スタンプと構造化理論

1. 構造化理論と宗教の地理学的研究

先述のように、パークは1994年当時、構造化理論が宗教の地理学的研究の枠組を形成することを予想したが、同時に、これまでこのような枠組が用いられなかったとも述べている²⁸⁾。こうした状況は、1990年代を通じて変化することがなかった。ポストモダニズムとは異なり、構造化理論の視点が宗教の地理学的研究に長らく応用されてこなかった背景には、構造化理論の主要な概念である「ロカール」の空間範囲が曖昧なことがある。そのため、地理学ではロカールの代わりに「ロカリティ」が用いられるようになった²⁹⁾。しかも、ロカリティが用いられたのは、文化地理学よりむしろ政治地理学や経済地理学においてであった³⁰⁾。

ところがスタンプは、2000年に、構造化理論の応用により宗教原理主義の地域的特性の解明を試みる著書『*Boundaries of Faith*」³¹⁾を上梓した。彼は1980年代より、一貫して宗教の地理学的研究に取り組んできた人物だが、1990年代までの研究は主に宗教分布に関するものだった。そこで、同書の内容に触れる前

に、それまでの研究を概観しておこう。

2. スタンプの宗教分布研究

宗教現象の分布の解明は、宗教地理学の最も初期的な研究である³²⁾。アメリカでは1960年代以降、ゼリンスキー (W. Zelinsky) やショートリッジ (J. R. Shortridge) らが、宗教統計を用いて、全国規模のキリスト教の宗派分布を検討した³³⁾。スタンプの宗教分布研究は、その系譜の上に位置づけられる。

彼の宗教分布研究の特色は、クラスター分析やロジスティック回帰分析といった計量地理学的手法を導入し、宗教分布の地域差やその要因を追究したことである。まず1984年には、宗教分布の地域差の歴史的变化を検証した³⁴⁾。すなわち、1906年と1971年における宗教別信者分布の指標に関する州ごとの差異を数値化し、その変化率に対してクラスター分析を行うことで、宗教分布の地域差の変化を明らかにした。

次に、1987年には、アメリカにおける白人プロテスタント信者の改宗要因の地域差を分析した³⁵⁾。スタンプは、まず改宗と関係すると思われる社会的属性の指標を設定するとともに、全米を9つの地域に分けた。その上で、郡単位での改宗率と諸指標の値とに関してロジスティック回帰分析を実施し、地域ごとの改宗要因を導いた。

さらに1998年には、アメリカのプロテスタントにおける保守系宗派の信者数の増加傾向に、どのような地域的要因が関わっているかを考察した³⁶⁾。この研究ではまず、信者数の増減に影響すると思われる指標を設定するとともに、プロテスタントの保守系・リベラル系の代表的教団をそれぞれ選んだ。その上で、1980～1990年の各教団の信者数増加率と諸

指標の値とに関してロジスティック回帰分析を実施し、保守的宗派の伸張の要因を探った。

宗教分布に関しては、これらのほかにも、特に計量地理学的手法を用いてはいないものの、独立200年祭の行事数の分布を通して、アメリカの「市民宗教」³⁷⁾の地域差を解明した研究³⁸⁾、カトリックの出身国別教区の残存傾向とその要因を探った研究³⁹⁾、有力プロテスタント教団である「ディサイプル教会」の信者分布の変遷過程とその背景を分析した研究⁴⁰⁾などがある。

このように、スタンプは1990年代まで、概ね一貫して宗教分布研究を行ってきた。ところが彼は、先述の通り、2000年に構造化理論を応用して宗教原理主義の地域的特性の解明を試みた『*Boundaries of Faith*』を著した。そこで次に、同書の内容について見てみよう。

3. 宗教原理主義研究への構造化理論の応用

『*Boundaries of Faith*』では、まず第1章において、研究方法と分析概念が提示された。彼は、宗教原理主義を特定の宗教・教団に限定せず、広く現代世界の文化的なダイナミクスの源泉と位置づけた。彼は、人文地理学は地域性とその文脈を超えた一般性との関係を追究すべきであるとするマッシー (D. Massey) の主張⁴¹⁾を援用して、原理主義を、工業化・モダニズム・帝国主義といった現代のグローバルな社会潮流に対する宗教的伝統主義者の地域的な応答の表現と定義した。そして、原理主義の多様性を、グローバルな力と多様な地域的文脈による弁証法的相互関係の産物として捉えようとした。

彼はまた、原理主義を、人々が生み出した独特の地域環境から形成される社会的・文化的現象とみなした。彼はこうした考えを、ロカー

ルに関するディアーとウォルチ (M. Dear and J. Wolch) やハウアー (J. Hauer) の議論⁴²⁾に基づき整理した。すなわち、多様な地域環境は宗教的ロカールの発達を促す。この宗教的ロカールのもとで、原理主義集団と他の社会集団との相互作用が、地域の社会状況や文化的特徴を形成したり、逆にそれらによって形成されたりする。この地域環境の中で、原理主義の発達は地域の社会構造や権力関係に影響を受けるといえる。

こうした立場から、彼は、原理主義の多様な特徴とその社会的影響とを、人文地理学の概念を用いて追究することを研究目的とした。具体的には、原理主義の多様な形態の発達におけるグローバルな力と地域的文脈、ならびに、原理主義者が自己認識や主張に用いる地理的概念をテーマに据えた。

第2章以降では、具体的に原理主義に対する分析が行われた。まず第2章では、北米プロテスタント・ユダヤ教・イスラーム・シク教・ヒンドゥー教の原理主義の歴史を概観した。彼によれば、原理主義の台頭の条件は、(1) 保守的な文化環境、(2) 倫理的・宗教的矛盾を抱える社会構造、(3) カリスマ性やヴィジョンを持った指導者という、地域的文脈の3要素の結合から生じる。

ついで第3章では、それぞれの原理主義の現況を概観した。彼は現代の原理主義集団を、地域環境との相互関係の点から、(1) 彼らが置かれた地域的文脈を支配しているもの、(2) 地域的文脈を支配していないが、社会に活発に参加するもの、(3) 地域的文脈を支配せず孤立するものの3つに類型化した。

さらに第4章では、原理主義者の地理的関心を分析した。まず彼は、原理主義における

空間・場所の重要性を考察した。それによれば、地理的問題は原理主義者の関心事の中心である。原理主義者は思想的境界で自他を区別すると同時に、地理的境界によって活動の場の確保を目指す。次に彼は、原理主義者の地理的関心を、(1) 聖なる空間の領域的支配、(2) 宗教的原則による世俗空間の支配、(3) 自らの宗教的アイデンティティと領域へのアイデンティティの関連付けの3つに類型化した。

最後に第5章では、原理主義による紛争が持続する背景を追究した。まず紛争が発生する要因として、原理主義集団が思想的・地理的境界を設定し、他集団の反発を買っていることを挙げた。次に、紛争が持続する要因としては、(1) 自らのみが真理を知っているという絶対的確信、(2) 領域の獲得・維持に対する責任感の2つを挙げた。そして、今後の見通しとして、原理主義運動を制限する試みはほとんどうまくいっておらず、原理主義による紛争は現代社会の脅威であり続けると予言している。

同書は、個々の原理主義について手際よく紹介しながら、それらの地域的特性を追究した。一方で、宗教分布はもはや中心的なテーマとはされておらず、これまでとの断絶性を感じさせる。第1章でスタンプが援用したマッシーの主張は、計量主義的手法に対する批判から引き出されたものだった。彼女は、計量主義的手法では特定地域の個性の要素を統合することへの関心が失われると主張した。また、社会過程の結果しか示していない分布研究にも批判的だった⁴³⁾。

このように、テーマや手法には断絶性がみられるものの、その目的意識は必ずしも変化

していない。スタンプは 1986 年、*Journal of cultural geography* 誌の宗教地理学特集号に、客員編集者として、宗教の地理学的研究に関する短いレビューを寄せた⁴⁴⁾。その中で彼は、この分野の不統一性や細分化を批判し、宗教の地域的多様性の要因を共通の課題に据えることを主張した。彼の関心は、1980 年代以来、ほぼ一貫しているといえる。

IV. むすびにかえて

本稿では、1994 年にパークが予想した、ポストモダニズムと構造化理論に基づく宗教の地理学的研究が、その後英語圏でどのように展開したかを、有力な研究者であるコンとスタンプの業績を通して概観した。コンは、ポストモダニズムの影響を受けた「新しい」文化地理学の分析概念を宗教空間研究に応用して「新しい」宗教地理学の枠組を確立するとともに、多くの事例研究を行った。一方、スタンプは宗教原理主義を事例として、構造化理論の応用により宗教運動の地域的特性を分析する枠組を提示し、その事例研究を行った。

最後に、2 人の業績に対する評価を通して、社会的視点による宗教空間研究の今後の見通しについて考えてみたい。コンはとりわけ、宗教空間が、国家のヘゲモニーとそれに対する教団や信者の抵抗・適応の中で形成される過程に注目した。だが、そのようにして形成された宗教空間が、逆に、国家や教団、信者などに影響を与える過程については、ほとんど言及していない。宗教が日常生活や世俗的空間の重要な構成要素であるならば⁴⁵⁾、宗教空間が社会集団に影響を与える過程についても分析し、宗教空間と社会集団との相互関係

を論じる必要があるだろう。

コンの「新しい」宗教地理学に対する直接的な批判は、今のところ顕在化していない。だが、ポストモダニズムそのものに対しては、キリスト教の視点に立つ地理学者によって、唯物論的姿勢やモラリティの欠如への批判がなされている⁴⁶⁾。唯物論に基づいて、宗教を他の社会的条件と同様に重視するコンの立場には、やや矛盾が感じられる。コンの研究は人文主義への批判の上に行われたが、日本では近年、人文主義的な立場から、宗教空間に対するポストモダニズム的な研究に対して、信仰者からみた場所の感覚や実在性を軽視しているという反論がなされている⁴⁷⁾。こうした批判を乗り越えていくためには、教団や信者のもつ聖地観・コスモロジーや、それに伴う宗教的行動をも分析した上で、聖地観・コスモロジーが社会集団に与える影響についても併せて論じていく必要があるだろう。

一方、構造化理論には、人文主義地理学とマルクス主義地理学の中道的アプローチとして人文地理学で注目されるようになった経緯があることから⁴⁸⁾、宗教の地理学的研究における対立を止揚する役割が期待される。実際にスタンプは、*'Boundaries of Faith'* の中で、原理主義の地域的特性を、社会的構築性と思想性の双方から同時に捉えることにある程度成功している。

しかしながら同書では、第 1 章で示された研究の枠組が、第 2 章以下の事例研究の結果を受けて再検証されることなく終わっている。例えば、宗教的ローカルとはどのようなものを指すのかは具体的に示されなかった。こうしたことが、同書が理論的な議論への深入りを避けたとするコンの批判を呼んでいる⁴⁹⁾。

確かに、コンが言うように、スタンプの理論は確立したものとは言い難い。しかしながら、地域外の動向をも踏まえつつ、宗教運動と地域の社会状況との相互関係を分析することで、宗教運動の地域的特性を論じていく彼の枠組は、筆者のように主に宗教空間を扱う者にとっても魅力的である。こうした枠組は、コンの「新しい」宗教地理学では充分になされなかった、宗教空間と社会集団との相互関係の分析にも応用可能であると思われる。今後は、このような構造化理論の視点が宗教空間研究にも幅広く応用されるとともに、事例の分析を通して枠組がより洗練されることが望まれる。

〔付記〕本稿の執筆にあたっては、江口信清先生・河島一仁先生・藤巻正己先生をはじめ、立命館大学地理学教室の先生方に貴重なご教示を頂戴しました。

注

- 1) ① Park, C. C.: *Sacred worlds: an introduction to geography and religion*, Routledge, 1994, 22 p. ② Kong, L.: Religious geography, in Duncan, J. S., et al. eds.: *A companion to cultural geography*, Blackwell Publishers, 2004, 374 p.
- 2) 前掲 1) ①、pp. 23 ~ 25.
- 3) Gregory, D.: Human agency and human geography, *Transactions of the Institute of British Geographers. New series* 6, 1981, 11 p.
- 4) ① Cosgrove, D. and Jackson, P.: New directions in cultural geography, *Area* 19, 1987, pp. 95 ~ 101. ② ジャクソン、P. 著、徳久球雄・吉富 亨訳『文化地理学の再構築 意味の地図を描く』、玉川大学出版部、1999 (原著 1992)。
- 5) ① Levine, G. J.: On the geography of religion, *Transactions of the Institute of British Geographers. New series* 11, 1986, pp. 428 ~ 440. ② Cooper, A.: New directions in the geography of religion, *Area* 24, 1992, pp. 123 ~ 129.
- 6) ① Kong, L. and Savage, V. R.: The Malay world in colonial fiction, *Singapore Journal of Tropical Geography* 7, 1986, pp. 40 ~ 52. ② Savage, V. R. and Kong, L.: Hugh Clifford and Frank Swettenham: environmental cognition and the Malayan colonial process, *Asian Profile* 22, 1994, pp. 295 ~ 309.
- 7) Kong, L. and Goh, E.: Folktales and reality: the social construction of race in Chinese tales, *Area* 27, 1995, pp. 261 ~ 267.
- 8) Kong, L. and Tay, L.: Exalting the past: nostalgia and the construction of heritage in children's literature, *Area* 30, 1998, pp. 133 ~ 143.
- 9) Kong, L.: Popular music in geographical analyses, *Progress in Human Geography* 19, 1995, pp. 183 ~ 198.
- 10) ① Kong, L.: Music and cultural politics: ideology and resistance in Singapore, *Transactions of Institute of British Geographers. New Series* 20, 1995, pp. 447 ~ 459. ② Kong, L.: Popular music and a 'sense of place' in Singapore, *Crossroads: An Interdisciplinary Journal of Southeast Asian Studies* 9, 1996, pp. 51 ~ 77. ③ Phua, S. C. and Kong, L.: Ideology, social commentary and resistance in popular music: a case study of Singapore, *Journal of Popular Culture* 30, 1996, pp. 215 ~ 231.
- 11) ① Kong, L.: Making 'music at the margins'? A social and cultural analysis of xinyao in Singapore, *Asian Studies Review* 19, 1996, pp. 99 ~ 124. ② Kong, L.: Popular music in a transnational world: the construction of local identities in Singapore, *Asia Pacific Viewpoint* 38, 1997, pp. 19 ~ 36. ③ コン、L. 著、神谷浩夫・大西則行訳「シンガポールのポピュラー音楽—ローカルな文化・グローバルな要素・地域のアイデンティティの研究—」、空間・社会・地理思想 3、1998、128 ~ 145 頁。
- 12) Kong, L.: The invention of heritage: popular music in Singapore, *Asian Studies Review* 23, 1999, pp. 1 ~ 25.
- 13) ① Savage, V. R. and Kong, L.: Urban constraints, political imperatives: environmental 'design' in Singapore, *Landscape and Urban Planning* 25, 1993, pp. 37 ~ 52. ② Kong, L.: 'Environment' as a social concern: democratizing public arenas in Singapore? *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia* 9, 1994, pp. 277 ~ 287. ③ Kong, L. and Yeoh, B.: Urban conservation in Singapore: a survey of state policies and popular attitudes, *Urban Studies* 31, 1994, pp. 247 ~ 265. ④ Yeoh, B. and Kong, L.: Reading landscape meanings: state constructions and lived experiences in Singapore's Chinatown, *Habitat International* 18(4), 1994, pp. 17 ~ 35. ⑤ Kong, L. and Yeoh, B.: Social constructions of nature in urban Singapore, *Southeast Asian Studies* 34, 1996, pp. 402 ~ 423. ⑥ Yeoh, B. and Kong, L.: The notion of place in the construction

- of history, nostalgia and heritage in Singapore, *Singapore Journal of Tropical Geography* 17, 1996, pp. 52 ~ 65. ⑦ Teo, S. E. and Kong, L.: Public housing in Singapore: interpreting 'quality' in the 1990s, *Urban Studies* 34, 1997, pp. 441 ~ 452.
- 14) ① Kong, L., Yuen, B., Briffett, C. and Sodhi, N.: Nature and nurture, purity and danger: urban women's experiences of the natural world, *Landscape Research* 22, 1997, pp. 245~266. ② Kong, L., Yuen, B., Sodhi, N. and Briffett, C.: The construction and experience of nature: perspectives of urban youths, *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie* 90, 1999, pp. 3 ~ 16.
- 15) Kong, L., Yeoh B., and Teo, P.: Singapore and the experience of place in old age, *The Geographical Review* 84, 1996, pp. 529 ~ 549.
- 16) Kong, L.: A 'new' cultural geography? Debates about invention and reinvention, *Scottish Geographical Magazine* 113, 1997, pp. 177 ~ 185.
- 17) Kong, L.: Geography and religion: trends and prospects, *Progress in Human Geography* 14, 1990, pp. 355 ~ 371.
- 18) Kong, L.: Mapping 'new' geographies of religion: politics and poetics in modernity, *Progress in Human Geography* 25, 2001, pp. 211 ~ 233.
- 19) ① Kong, L.: Cemeteries and columbaria, memorials and mausoleums: narrative and interpretation in the study of deathscapes in geography, *Australian Geographical Studies* 37, 1999, pp. 1 ~ 10. ② Kong, L.: Religion and technology: refiguring place, space, identity and community, *Area* 33, 2001, pp. 404 ~ 413.
- 20) 前掲 17)、363 p.
- 21) Kong, L.: The sacred and the secular: exploring contemporary meanings and values for religious buildings in Singapore, *Southeast Asian Journal of Social Science* 20, 1992, pp. 18 ~ 42.
- 22) 前掲 18)、221 p.
- 23) ① Kong, L.: Ideological hegemony and the political symbolism of religious buildings in Singapore, *Environment and Planning D: Society and Space* 11, 1993, pp. 23 ~ 45. ② Kong, L.: Negotiating conceptions of sacred space: a case study of religious buildings in Singapore, *Transactions of Institute of British Geographers. New Series* 18, 1993, pp. 342 ~ 358.
- 24) Kong, L.: In search of permanent homes: Singapore's house churches and the politics of space, *Urban Studies* 39, 2002, pp. 1573 ~ 1586.
- 25) Kong, L.: The commercial face of God: exploring the nexus between the religious and material, *Geographia Religionum* 10, 1996, pp. 123 ~ 141.
- 26) Kong, L. and Tan, R.: Women in a Catholic world: a case study of Singapore, *Asian Profile* 25, 1997, pp. 473 ~ 489.
- 27) Tong C. K. and Kong, L.: Religion and modernity: ritual transformations and the reconstruction of space and time, *Social & Cultural Geography* 1, 2000, pp. 29 ~ 44.
- 28) 前掲 1) ①、23 p.
- 29) ジョンストン、R. J. 著、竹内啓一監訳、高田普久男訳『場所をめぐる問題—人文地理学の再構築のために—』、古今書院、2002、69頁(原著1991)。
- 30) 香川雄一「和歌山における公害反対運動の地域的展開」、*人文地理* 55-1、2003、46頁。
- 31) Stump, R. W.: *Boundaries of Faith: geographical perspectives on religious fundamentalism*, Rowmans and Littlefield Publishers, 2000.
- 32) Ley, D.: Religion, geography of, in Johnston, R. J., et al. eds.: *The dictionary of human geography 4th ed*, Blackwell Publishers, 2000, 697 p.
- 33) ① Zelinsky, W.: An approach to the religious geography of the United States: patterns of church membership in 1952, *Annals of the Association of American Geographers* 51, 1961, pp. 139 ~ 193. ② Shortridge, J. R.: Patterns of religion in the United States, *The Geographical Review* 66, 1976, pp. 420 ~ 434. ③ Shortridge, J. R.: A new regionalization of American religion, *Journal for the Scientific study of religion* 16, 1977, pp. 143 ~ 153. など。
- 34) Stump, R. W.: Regional divergence in religious affiliation in the United States, *Sociological Analysis* 45, 1984, pp. 283 ~ 299.
- 35) Stump, R. W.: Regional variations in denominational switching among white Protestants, *Professional Geographer* 39, 1987, pp. 438 ~ 449.
- 36) Stump, R. W.: The effects of geographical variability on Protestant church membership trends, 1980-1990, *Journal for the Scientific Study of Religion* 37, 1998, pp. 636 ~ 651.
- 37) アメリカが「神の下の」国であるという概念に関する、一連の信念・儀礼。
- 38) Stump, R. W.: Toward a geography of American civil religion, *Journal of Cultural Geography* 5(2), 1985, pp. 87 ~ 95.
- 39) Stump, R. W.: Patterns in the survival of Catholic national parishes, 1940-1980, *Journal of Cultural Geography* 7(1), 1986, pp. 77 ~ 87.
- 40) Stump, R. W.: Spatial patterns of growth and decline among the Disciples of Christ, 1890-1980, in Williams, D. N. ed.: *A case study of mainstream Protestantism: the Disciples' relation to American culture, 1880-1989*, Wm. B. Eerdmans Publishing,

- 1991, pp. 445 ~ 469.
- 41) Massey, D.: Introduction Geography matters, in Massey, D., *et al.* eds.: *Geography matters! A reader*, Cambridge University Press, 1984, pp. 1 ~ 11.
- 42) ① Dear, M. and Wolch, J.: How territory shapes social life, in Wolch, J., *et al.* eds.: *The Power of geography: how territory shapes social life*, Unwin Hyman, 1989, pp. 3 ~ 18. ② Hauer, J.: What about regional geography after structuration theory? in Johnston, R. J., *et al.* eds. *Regional geography: current developments and future prospects*, Routledge, 1990, pp. 85 ~ 102.
- 43) 前掲 41)。
- 44) Stump, R. W.: Introduction, *Journal of Cultural Geography* 7(1), 1986, pp. 1 ~ 3.
- 45) Holloway, J. and Valins, O.: Editorial: Placing religion and spirituality in geography, *Social & Cultural Geography* 3, 2002, pp. 5 ~ 9.
- 46) ① Clark, M.: Developments in human geography: niches for a Christian contribution, *Area* 23, 1991, pp. 339 ~ 345. ② Pacione, M.: The relevance of religion for a relevant human geography, *Scottish Geographical Journal* 115, pp. 117 ~ 131.
- 47) ①川合泰代「富士講からみた聖地富士山の風景—東京都23区の富士塚の歴史の変容を通じて—」、*地理学評論* 74A-6, 2001, 349 ~ 366 頁。②中川 正「聖地とは何か」、*地理* 579, 2003, 8 ~ 13 頁。
- 48) 森川 洋『英語圏諸国における人文地理学の研究動向—地誌学を中心として—』、広島大学総合地誌研究資料センター、1998、11 頁。
- 49) Kong, L.: Review of *Boundaries of Faith: geographical perspectives on religious fundamentalism* by Stump, R. W., *Progress in Human Geography* 26, 2002, pp. 286 ~ 287.